フライデイ・ナイト・フィーバー

フライデイ・ナイト・フィーバー

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19703160

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, ♡喘ぎ

ほたてろさん（Twitter：@hotatero ）からリクエストいただきました、クラブでのエク霊です。このお酒強い設定の師匠の呑み方は真似しないでください……！！お好きな方はお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

フライデイ・ナイト・フィーバー

退屈だなぁ、とエクボはあくびをした。
相談所はいつも通り。ほとんどの客は肩こりや『っぽく』見える心霊写真？もどきを持ち込んできて、それを霊幻が片付ける。
たまにの本物は芹沢かエクボか偶々来ていた茂夫が片付ける。
お金を受け取って。少しばかり感謝されたりして。
……それの繰り返し。
刺激の無い毎日にエクボは飽き飽きして──いや、刺激ならあった。
たまに霊幻から向けられる、熱い視線。それが何を意味するか、分からないほどエクボはオボコでは無かった。
が。
（趣味じゃねぇんだよなぁ）
エクボは霊幻のことが嫌いでは無い。
だが、エクボはもっとヒリつくような、激しい恋の駆け引きが好みであった。
付き合ったらおウチデートがメインになって、だらだら夫婦関係になっていくのが目に見えているような、そんな相手はごめんだった。
（つまらねえな）
現状に不満は無い。だが希望も無い。
エクボはそんな現状をわざわざ変えようとは思わなかったが、満足もしてはいなかった。
（こいつ、いつ告白してくるんだろ）
今日もたまに熱視線を寄越してくる霊幻にエクボはため息を吐きたくなる。
どうやって断ろうか。それともヤるだけヤろうか？最低？知ったことか、こちとら悪霊だぞ。
そんな相手に懸想する方が悪い、とエクボは思う。
「お疲れ様でした」
物思いに耽っていたら、就業時間が終わった。
「師匠、今日もラーメンは行かないんですか？」

「ん、まあな。悪いな」
金曜日はいつも、霊幻は飲みや食事を断る。これもいつものことだ。
「霊幻さん、なんで金曜日はいつも誘いを断るんだろう」
だが今日は、芹沢が何気なく茂夫に話しかけた。
「さあ……恋人とデートとかじゃ無いですか？華金？ですし」
そう言われて、エクボは冷水をかけられたような気分になった。
霊幻は自分のものだ、といつの間にかエクボは思い込んでいた。
だって霊幻はエクボのことが好きなのだから。
でも。
だからといって。
他に恋人を作ってはいけないという法律は、無い。
相談所の施錠をしたら、鞄を片手に霊幻は夜の街に足を向ける。
エクボは勝手に裏切られた気持ちになりながら、不可視モードで霊幻のあとをつけて行った。
霊幻は自分のアパートには向かわず、調味駅に向かう。
どこかうきうきと楽しそうな霊幻の様子に、反比例するようにエクボの機嫌は下がっていく。
（どこのオンナと会うのをそんなに楽しみにしてやがるんだよ）
浮気相手が来たら呪ってやる。自分勝手に悪霊らしくそう思いながらエクボがふよふよとあとをつけていると、意外なことに霊幻は新宿駅で降りて歓楽街に入って行った。
（あいつ、風俗にいれあげてやがるのか？）
そいつはいけない、正してやろう、とこれまた自分勝手に悪霊は思う。
とにかく自分のものだと思っていた霊幻が、他人に心を奪われているのが気に入らないのだ。
一度悪霊にすきを見せたのなら、つけ込まれても仕方ないのだ、とエクボは思う。
が、霊幻はひょいひょいと酔っ払いをかわしながら、風俗店ではなくダンス・クラブ、Ｃｌｕｂ ＤＯＰＥに入って行った。
（……はぁ！？）
似合わないにもほどがあった。

（あいつ、こんな所で何してんだ？）
同じように思ったのか、入り口で黒服に止められている。
「お客様、店をお間違えではありませんか」
「！オイ馬鹿、クイーンだぞ、何言ってやがる！！」
だが別の黒服が、霊幻の肩にかけられた手を払った。
霊幻は財布からＶＩＰカードを取り出して黒服に見せる。
「これでいいか？」
「び、ＶＩＰカード……！！」
「大変失礼致しました、霊幻様。新人なもので、ご容赦ください」
恭しく屈強な黒服が霊幻に頭を下げる。
「気にしないでよ。警備ご苦労様」
微笑んでひらりと手をふる霊幻に黒服２人が改めて深く頭を下げる。
エクボはその様子を、あんぐりと口を開けて見ていた。
（は？は？は？）
クラブの中は、別世界だった。
暗い店内を、電飾やレーザーが照らし、巨大なミラーボールが光を乱反射する。
大音量で流れるアップ・ミュージックに男女が身体を載せる。
異世界の夢幻に、彼らはうっとりと恋に落ちるのだ。
たとえそれが一夜のあやまちだとしても。
（こんなところで何してるんだよ、あいつ）
クラブスタッフや常連らしい連中に声をかけられて挨拶する霊幻のグレースーツは、不思議と場に馴染んでいた。
霊幻に話しかける人間がその頬や腰に触れる度に。
チリチリと霊体が不快に焦げるのをエクボは感じていた。
（──こんなところからは早く出させよう）
運の良いことに（吉岡にとっては運の悪いことに）、クラブの中で良く見知った顔が警備をやっていた。
エクボはひゅぽっと吉岡の身体に憑依する。
ついでに周りの人間に『吉岡は今日はオフだ』という暗示をかけた。
「ったく、世話の焼ける」

こんな所で遊んでいたらどんなトラブルに巻き込まれるか分からない、とそれっぽい理由を考えだしながらエクボは霊幻をここから追い出すために近づいていく。
かき分ける人混みから若い女のいい匂いと、粋な男のフェロモン臭さがダイレクトに感じられて、そっとエクボは高揚する。
こういう場所は嫌いでは無かった。
──ただし、目の前で霊幻が見知らぬ若い男に腰を抱かれて、くすくす笑いながら、キスしそうな距離で酒を酌み交わしたりしなければ、だが。
「お客様、ちょっと」
警備に声を掛けられた霊幻から、男はビビって逃げた。
「なんですか？」
霊幻は少し不満げにエクボを見上げて、
「……エクボ？」
見抜いた。
「お前、なんで、分かって……！？」
「いやていうかエクボこんな所で何してんの？ノリにきたの？」
不思議そうに小首を傾げる霊幻の手にテキーラのロックグラスがあってエクボはぎょっとする。
「お前、下戸のくせにこんなに強い酒……！！」
「あーそれな、実は俺な……」
クラブの音が止まって、ガコンと照明が全部切られてホールが真っ暗になる。
ぱ、と霊幻にスポットライトが当たって。
「クイーーーーンアラタカーーーーっ！！！！」
ＤＪのシャウトが響き、ワッとフロアが沸き立った。
「ええ？おい、止めろよ」
霊幻は手をふるが、まんざらでもなさそうだ。
「アイツが来てるならこの曲だ！みんなフロアを空けてくれ！！
Mark Ronson、Uptown Funkーーーー！！！！」
重低音がフロアに響き、スモークが焚かれ、閃光が場を満たす。
ギャラリーの手拍子に身体を揺らしながら霊幻はフロアの中心に躍り出て。

ノリのいい音楽に合わせて、手足をすべらかに流れさせる。
見るものを魅了する、見事なダンスであった。
開いたジャケットの裾がひらひらと揺れてセクシーにギャラリーを煽る。
たまらなくなった男が１人フロアに躍り出て、霊幻にデュエットを申し込む。
だが霊幻は踊りながらその男をギャラリーの方に放り投げるように誘導した。
「「「ステファニー！」」」
野次が飛ぶ。『思わせぶりだがサせない女』、のスラングだ。
霊幻が踊っていると、我こそはという男女が躍り出てくる。が、みんな袖にされていた。
そんな様子にエクボはヒヤヒヤして、思わずフロアに出てしまった。
「おい霊幻──」
身体をくねらせながら霊幻はエクボに手足を絡み付かせて。
ぐいっ、と太ももでエクボの股間を擦り上げた。
「う、おっ！？」
ヒューッ！！！！、と野次が飛んでくる。
「俺をご所望か？上級悪霊様」
前屈みになったエクボはキッと霊幻を睨み付ける。
「ちょうど曲が終わる。勝負に勝てたら踊ってやってもいいぜ？」
エクボの首に腕を回した霊幻が紅潮した顔をリズムにノリながら近づけて──がぶりとエクボの鼻を甘噛みした。
「いっ！踊る、って……！！」
「お前の腕の中で、腰をくねらせて、だよ」
曲が終わってフロアから退場する霊幻が蠱惑的にエクボに笑いかけて、思わずエクボはごくりと生唾を飲み込んだ。
慣れた霊幻のあとについてバーカウンターに向かうと、そこにはショットグラスが２つ置かれていた。
「さっき言いかけたんだけど、俺、実は酒めちゃくちゃ強ぇんだよ」
バーテンがグラスにテキーラを注ぐ。

真ん中にカットレモンが置かれた。
「気分に左右されやすくってな。酔おうと思えば水でも酔えるし、そうじゃなかったらザルなんだよなあ」
グラスに霊幻はチュッと口付ける。
「約束通り、ショットで俺に勝てたらお前と踊ってやるよ」
ギャラリーが沸き立ち、口笛が鳴り響く。
「クイーンを腕の中で踊らせる初の男になれるか！？公正に見守らせてもらいます！！」
バーテンがマイクでアナウンスする。
霊幻は、にっ、と自信ありげに笑って、くいっとグラスを傾けた。
（マジかよ）
チュッ、とカットレモンを吸ってリップ音を響かせる。
ペロリと果汁を舐めとる霊幻の唇が、妙に色っぽい。
──この身体がどれぐらい酒に強いのかは分からない。エクボは少し躊躇ったが、
（下戸の霊幻に負けてたまるか）
ぐいっとグラスをあおった。
ぐらりと揺れる視界をはっきりさせるために、爽やかなレモンを口にする。
その仕草が色っぽかったのか、ギャラリーからきゃあっと黄色い悲鳴が上がった。
「やるねぇ。……どんどんいくぜ？」
「「「ショット！！」」」
ギャラリーの掛け声に合わせて霊幻はくいっとグラスを傾けて、レモンをかじる。
エクボも同じようにするが、まだ平然としている霊幻に大して、エクボは２杯目でふらふらしてきた。
（俺が弱いんじゃねぇ、この身体がそんなに強く無いだけだ）
エクボは悔しくそう思う。
いつでも声を掛ければ抱けるだろう、と思っていた身体が。
まさか抱けないかもしれない、なんて、エクボは悔しくて堪らなかった。
（お前、俺が好きなくせに、抱かれたいくせに……！！）

相談所でのうだつのあがらない姿とは打って変わって、霊幻はクラブでは女王として君臨している。
（アレを組み伏せて、俺様に愛を乞わせたい――）
ふつふつと、エクボの中で欲が湧き上がってきていた。
「「「ショット！！」」」
しかし、５杯目が霊幻の口の中に消えたころ、もうエクボは椅子に座ってられなくなっていた。
「お、おい大丈夫か？」
霊幻が心配して声をかけてくるのすらエクボには屈辱だ。
「うるへー、らいじょううにひまって……」
エクボは何とか６杯目を手に取る。
そしてそのままぶっ倒れた。

※

「……あ？」
豪奢なシャンデリアが目に入って、エクボは目を細める。憑依体に引き摺られて気絶していた。
「ここは……」
「ＶＩＰルームだ」
そして応えた相手が自分に跨がっているのを見て、エクボは目を細めた。
「……何してる」
「だって、勝負は俺の勝ちだろ？」
ごり、と。
霊幻が腰を前後に揺らすと、お互い反応してる性器同士がこすれた。
「……っ！？」
「お前の上で踊りたいんだよ。せいぜいチンポおっ勃たせてろ」
ごり、ごりと霊幻が着衣のままスマタをしてきて、エクボの怒張はその硬度を高めていく。
「〜♪」
霊幻はスピーカーから響くミュージックを、それこそご機嫌に口ず

さみながらしゅるりとネクタイを抜いた。
「一丁前にこの俺様を棒扱いか、やるじゃねぇかクイーン」
「バイブよりは楽しませてくれんだろ？」
期待に舌舐めずりする霊幻の唇を、思わずエクボは引き寄せた。
「ん……」
強いテキーラの味に、レモンの香り。
……これがギャラリーどもが指を咥えて見てた唇か、と思うとエクボの下半身にカッと熱がこもった。
「こら、だめだろ。エクボから仕掛けるの禁止な」
「なんでだよ、お前俺からキスされたら嬉しいだろ」
だって、お前は。
霊幻はきょとんとしてから、妖しく笑った。
「──自惚れ屋」
そう言われて、エクボは赤面する。
もしかして、勘違いだったのだろうか？だがそれなら、この状況はどう説明する。
「俺を押し倒しておいて誤魔化せると思うんじゃねぇぞ。お前、俺の事が好きだろ？」
ふ、と綺麗に霊幻は微笑って。
「うん。好きだよ」
──ほらみろ！
エクボは嬉しくなる。思った通りじゃないか、と。
「エクボ、気持ち良くしてやるよ」
蠱惑的に口角を上げて霊幻はエクボのズボンのベルトを外す。
ジ、とチャックを口で下げる姿を、信じられないものを見る目でエクボは眺めていた。
確かにエロい。が、
（誰に仕込まれたんだよ）
と過去の男に妬いてしまう。
「わ、ガン勃ちじゃん」
下着をずらして露出させたエクボの性器に、チュッと霊幻はご挨拶のキスをする。
それだけで出そうになって、エクボは思い切り舌打ちした。

「あー美味そう」
うっとりと霊幻は興奮して粘つく唾液をエクボの性器に絡めながら口淫する。
その傍ら、自分のズボンと下着を脱ぎ捨てていた。
「ちょっと待ってろよ、ボウヤ」
「は、そう呼ぶからにゃ楽しませてくれんだろうな、姐チャン？」
霊幻はローションの小袋を噛み切りながらエクボと言葉で遊ぶ。
クチュ、とナカを湿らせた。
「──いただきます♡」
淫らにM字開脚をした霊幻がぐぷ、とエクボの性器を飲み込んでいく。
「あっ……♡やっぱ本物は、違ぇな……っ♡」
「……は？」
いや待て、とエクボは焦る。
「お前、処女か……！？」
「は、あ？とう、ぜん……だろっ……」
少し苦しそうに腰を下ろしながら応える霊幻に、エクボは混乱する。
「だってお前、結構慣れて……」
「触り合いだけなら、遊びでちょっと、な？でも後ろは……エクボじゃないと、嫌だった、から……」
きゅん、とエクボの胸が締め付けられる。
「デケぇバイブ床に固定して、エクボだと思って、ずーっと腰振ってたんだよ♡」
が、すぐに別方向に煽られた。
「あ、あっ♡すげ、エクボのチンポ気持ちいいっ♡いい所に当たるっ♡♡」
膝立ちになった霊幻は好きなように腰を上下させてエクボを味わう。
その乱れた姿をかきいだいて、押し倒して、がつがつ犯したい。なのに酒で力の入らない身体に、エクボは心の底から舌打ちした。
「わるい口だなあ」
腰を振りながら霊幻はエクボの唇をぐるりと撫ぜる。

「な、キスしたいか？」
屈辱を感じながらもエクボは頷く。
「そうだなぁ。もう一杯呑みたいから……グラスになってくれよ」
「！？」
霊幻はテキーラの瓶をテーブルから手に取り、中身をエクボの口の中に注ぎ込む。
「エクボは呑むなよ？」
そう言って、ちゅ、と柔らかくエクボの唇を食んで──まるでグラスのように、その口の中からテキーラをすすった。
「ん、ぐ……！！」
物扱いにエクボの額に青筋が浮かぶ。
「ふふ、そう怒るなよ、んっ」
だが霊幻が舌を絡めながら口内のテキーラを啜り始めたことで、怒りはぞくりとした快感に変わった。
「ん……ん、んぁ……っ」
エクボの口の中でテキーラが２人の唾液と混じり合う。唇の端から啜り上げる激しいキスでこぼし合いながら、エクボと霊幻はその行為に酔っていく。
「あ♡はぁ、ぅんっ♡えくぼそこ、そこ気持ちいい……っ♡」
獣のようなキスで結局少しテキーラを飲んでしまい、クラクラしながらエクボは必死に腰を突き上げた。
「ぇくぼぉ……っ♡」
潤んだ瞳が切なそうにエクボを見上げる。
互いの瞳に翻弄されながら、２人はうっとりするような絶頂を、テキーラを絡ませてじっくり味わった。

※

エクボは上機嫌であった。
つまらない男だと思っていた霊幻があんなに魅力的だったなんて、予想外の収穫だったのである。
「よう、霊幻。今日の依頼はなんだ？」
身体付きで相談所に来てやり、霊幻の腰を抱きながら前髪を整えて

やる。
そのエクボの手を弾かれて、彼は目を丸くした。
「おい、一回寝たぐらいで彼氏ヅラするんじゃねぇよ」
霊幻はするりとエクボの手からも逃げ出す。
「は？お前……はぁー！？」
手の中の空虚に、エクボは思わず叫ぶ。
「俺様の事が好きなくせに、なんだよその態度はよ！！」
ギリギリと歯噛みして。
「ぜってぇモノにしてやる……！！」
悪霊は闘志を燃やすのであった。

一方、霊幻は。
「……やぁっと落ちたな」
くふりとしたたかに笑うのであった。

終わり